

(3) 除草剤による雑草防除の基本

除草剤には、すべての植物に対して効果のある非選択性除草剤と特定の植物のみを枯らす選択性除草剤があります（図 V-7）。

『令和5年営農改善資料』50 ページに選択性除草剤のことを記載していますので、ここでは、草地更新における非選択性除草剤の処理体系について説明します。

1) 非選択性除草剤とは

牧草地に使われる非選択性除草剤は、一般には“グリホサート系除草剤”と言われています。

グリホサート系除草剤は、植物固有のアミノ酸の生合成を阻害することで、植物が生長に必要な養分を使うことができなくなり、植物を枯死させます。

グリホサート系除草剤は、植物の葉や茎を通じて吸収され、速やかに根や地下茎まで移行していきます。見た目の変化としては、まず植物がしおれ、頂端生長部の黄化やクロロシス(※)が生じ、その後褐色化し、全体が枯死していきます(写真 V-17)。

※クロロシス……糖を合成する能力が失われ、植物体が白くなること

非選択性除草剤	選択性除草剤
<ul style="list-style-type: none"> すべての植物に効果あり 草地更新時に使用する 	<ul style="list-style-type: none"> 特定の植物のみ効果あり 草地では、ギシギシ類に対しての選択性除草剤がある

図 V-7 除草剤の種類



写真 V-17 除草剤散布後の変化

(左・根室市) 散布後 1 週間経過 所々色が薄くなっているがまだ緑色が残っている

(右・上川管内 B 町) 散布後 2 週間経過 植物全体が黄化、クロロシスが生じる

非選択性除草剤の基本的な処理体系は、今ある植生をリセットするための①前植生処理(雑草茎葉散布)と、は種床造成後に種子から出芽してきた雑草を枯死させるための、②は種床処理(は種前雑草茎葉散布)の2回タイミングがあります(図 V-8)。



図 V-8 非選択性除草剤の処理体系

2) 前植生処理（雑草茎葉散布）

考え方	草地をリセット	地下茎などに効果的に作用する
処理季節	夏から秋	地下茎からの再生が一段落し、除草剤が浸透しやすい
タイミング	刈取後20～30日間	雑草の草丈が適正になる目安
	雑草草丈20～30cm	十分に葉が展開し、散布ムラがづらい
注意事項	除草剤の用法用量を守る	使用基準が定められている
	専用ノズルを使用する	ドリフトや散布ムラを軽減する
	処理後10日は耕起しない	除草効果が発現しない可能性がある
	実生の発生は抑えられない	は種床処理と組み合わせる

3) は種床処理（は種前雑草茎葉散布）

考え方	再生した雑草を枯殺	実生が発生する雑草に効果的
処理季節	夏から8月下旬	は種した牧草が越冬できる限度が8月末
タイミング	は種10日前～は種当日	再度実生が出ないうちには種する
	雑草草丈20～30cm	は種時に枯草が多くなるらない程度
注意事項	除草剤の用法用量を守る	使用基準が定められている
	専用ノズルを使用する	ドリフトや散布ムラを軽減する
	は種床造成時に鎮圧する	実生雑草や地下茎からの再生をそらせるのに効果的
	泥炭土壌では避ける	泥炭土壌中に残存し、薬害を生じる可能性がある

草地に使用できるグリホサート系除草剤の商品を示しました（表 V-4）。防除したい雑草の種類や使う商品によっても、薬剤の使用量は異なるので注意が必要です。

使用上の注意事項や使用量などの取り扱いについては、各商品のラベルや農薬メーカーホームページ、または「北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」をご確認ください（巻末付表の 49～54 ページ参照）。

表 V-4 主なグリホサート系除草剤

〈例〉「クサトリキング」での前植生処理時の液量

雑草全般が多い草地	250～500ml/10a
ギシギシ類が多い草地	500～700ml/10a
シバムギが多い草地	500～700ml/10a
フキが多い草地	600～800ml/10a
(いずれも水量は 50L/10a)	

このように草地に多い雑草の種類によって
使用量が異なるので注意！

商品名	前植生 処理	は種床 処理
エイトアップ液剤	○	○
グリホエキス液剤	○	○
サンフーロン液剤	○	○
クサトリキング	□	○
サンダーボルト007	○	
タッチダウンiQ	□	○
ブロンコ	○	○
ラウンドアップ マックスロード	○	○

※○は雑草全般（イネ科雑草、広葉雑草）に効果
※□は雑草全般+フキに効果